

ジェイコブ・コールグ 著

ギッシングの生涯と作品（後）

松 岡 光 治 訳

ギッシングはイーディスと1891年2月に結婚し、ロンドンの喧騒を逃れて静かな田舎町エクセターで新生活を始めた。彼が結婚後6ヶ月たらずで書き上げた『流謫の地に生まれて』（1892）は、¹ このエクセターを舞台として利用し、どの作品よりも深いレベルで19世紀の道德問題を扱った小説である。主人公はゴドウィン・ピークという名前の卑しい生まれの少年で、彼がカレッジを自主退学するエピソードは、ギッシングがオーエンス・カレッジで受けた放校処分を偽装したものである。科学に関心のある自由思想家であった主人公は、良家の娘シドウェル・ウォリコムに恋するあまり、不可知論者であるにもかかわらず、それを隠蔽すべく神学生のふりをする。彼は不実な自分を正当化するために、主義主張を持たない人間は自由に好きなことをしてもいいのだと自分に言い聞かせる。このようにギッシングは信頼性のない実存主義的な世界観への扉を開く。しかし、そこでは自分自身の道德観を構築することができるとはいえ、その責任もまた負わなければならない。ピークは自分のごまかしが暴露された時、その罪ゆえに自分が属したかった階級から「追放された人間」となったことを、生まれの卑しさゆえに悟った時と同様にはっきりと悟り、自分の道德心の欠如を祖先が無産階級だったせいにする。『流謫の地に生まれて』は精神的葛藤に関するギッシングの最も深みのある研究であり、その幾らかを彼は自分が高く評価したドストエフスキー、トルストイ、ツルゲーネフ、その他の大陸の作家たちに負っている。²

1891年、新しい出版社ロレンス・アンド・プリンからの要請を受け、³ ギッシングはヴィクトリア朝の小説を支配していた三巻本形式の伝統を破り、生まれて初めて一巻本形式の小説を書いた。当然ながら、彼は新しい形式によって以前よりも統一のとれた、焦点の定まったプロットを用いて、登場人物の数を減らすことができただけでなく、流行しつつあった客観性や「劇的性格」の高い手法をとることができた。非合法の組合に足をつっ込み、秘密がばれた時に深刻な結果を招いて苦しむ政治家を描いた『デンジール・クウォリア』（1892）は、⁴ 抑圧的な因襲の力についてだけでなく、それに背くことの危険性についても警告した書である。クウォリアはリリアンを自分の妻として人に紹介しているにもかかわらず、この女性と結婚することができない。彼女が以前ある男と結婚していたからであるが、その男が式後すぐに逮捕されたために、彼女は以後ずっと彼に会っていない。そして、行方不明の夫アーサー・ノースウェイが雇われ、クウォリ

アの選挙での勝利を阻むために町に姿を現わし、リリアンは自分の妻だと主張する。結局、この秘密は公にされることなく、クウォリアは国会での議席を勝ち取る。しかし、秘密がばれるという恐怖のために、リリアンは入水自殺に駆り立てられ、彼もまた結婚のように確立された慣習に対して、その強い効力を認めざるを得なくなる。

『デンジル・クウォリア』の主人公は特に女性の権利に関して好意的な見解を持っている。女性の権利というテーマは、ギッシングの多くの初期作品群において大して重要な位置を占めていなかったが、彼の次の作品『余計者の女たち』(1893)では主題となる。⁵社会における苦しみや不公平の多くは、女性に対する社会の劣等視が原因だと彼はいつも感じていた。『余計者の女たち』で彼は いつものように悲観的にはあるが

自分たちの困難に様々な方法で対処しようとする女性を扱っている。小説の中心には、女性に労働の訓練を施し、穏やかな形で女性解放の準備をさせるために設立された協会がある。ヒロインのロウダ・ナンは、この組織への忠誠心と彼女が結婚したいと思っている恋人との板ばさみで苦しむ。そして、この主たるプロットの伴奏として数多くの脇筋がある。例えば、アリスとヴァージニアという中年のマドン姉妹は、仕事がないためにかろうじて生き残ることができるレベルの生活を余儀なくされる。更に、下の美しい妹モニカは店での骨折り仕事から逃れるために結婚し、その報いを受けることになる。この小説が女の人生に下す審判は社会問題の範囲を越えているが、女が社会的・経済的な自立を求める際に直面するジレンマを鋭く洞察したものであり、今では女性問題を最も客観的に、かつ透徹して論述したものとして知られている。

1893年、一人の息子の父となっていたギッシングは、家族を連れてロンドンへと戻った。⁶「また都会の街路を見たくなくなった」と彼はベルツ宛ての手紙に書いている。⁷ほとんど一年間、彼が着手した新しい小説の筆は進まなかったが、それとは別の道が急に開けた。ある編集者から短篇小説を幾つか雑誌に書いてくれないかと頼まれたのである。⁸短篇はもう何年も書いていなかった。彼は本格的な長さの小説を書こうとするたびに挫折していたが、短篇ならば何とかできるだろうと考えた。短篇小説は収入源として彼にとって歓迎すべきものだった。彼の長篇小説の売れ行きは相変わらず芳しくなかったが、短篇の方は結構な儲け口となったからである。この頃の一般大衆は、ギッシング自身が『新クラブ街』で述べたように、短い形式の読み物を要求し始めていたし、三巻本形式の小説は出版事情の変化によって消滅しつつあった。⁹

難産の末、1894年4月に完成した『女王即位50年祭の年に』(1894)は、¹⁰ ギッシングにとって最後の三巻本形式の小説であった。中心人物は結婚によって自分の自由を危険にさらしてしまう若い女性で、彼女は同じように独立心の強い夫と別居する一方で、子供を産んで自活しなければならなくなる。この小説の主要な筋は、現代社会の諸悪を暴き出す場面で互いに緩やかな結び付きを見せるような、そういった非常に多くの脇筋と

人物たちとの間に、埋没してしまった感がある。ギッシングは、ヴィクトリア女王の即位50年祭を祝う群集の行動を示す時、その大衆文化が孕む危険性に特別の注意を促している。無教養さが表出した民主主義、卑俗な広告、無節操な日和見主義、粗野な態度など、すべてが白日のもとにさらされる。しかしながら、物語の中心は相変わらず夫婦の不和である。結婚生活は卑劣な農として提示されるが、ヒロインが実践する別居生活もまた様々な危険を孕んでいる。

おそらく、1つには結婚した男として安定した収入を得る必要があると思ったから、1つには『新クラブ街』で示した文学市場についての見解を自分でも受け入れたので、この頃にはギッシングもまた「商売の時代」における行動様式を少し学び、プロ意識を高めて自分の仕事に取りかかるようになっていた。彼は作家協会に入って著作権の代理人を雇い、¹¹ 短篇や中篇の小説を書くように依頼された仕事を特に喜んで引き受けた。積極的に出版界と関係を持つようになった結果、作家や編集者たちと友だちになったり、社交上の約束をしたりする機会が開けた。彼は晩餐会の招待を受けてオマル・ハイヤム・クラブに入会し、¹² 週末を社交界の人々と過ごすようにさえなった。年老いたメレディスとも再会し、H・G・ウェルズ、トマス・ハーディ、エドワード・クロッド、その他の文人たちと交わりを結んだ。¹³ 当時、ギッシングと会った人々にとって、彼が以前は貧乏だったとか世捨て人だったとかは、とても信じがたいことであった。

1894年から97年にかけて、ギッシングはいつものテーマから離れて4つの中篇小説、すなわち『イヴの身代金』（1895）、『埋火』（1895）、『下宿人』（1895）、『都会のセールスマン』（1898）を書いた。¹⁴ すべて出版者たちや編集者たちに確約したことを果たすために執筆された小作品だが、そこでギッシングはコメディの意外な才能と皮肉な状況を手際よく展開させる才覚とを見せている。これらの小説は効果的に市場に出され、再版と翻訳において成功を収め続けた。1997年の『渦』において、¹⁵ 再びギッシングは真剣に社会を観察した小説へと戻り、自分にとって未知の舞台や状況を扱ってみようとした。登場人物たちは有閑階級に所属する社交界の人々である。文学青年の主人公は、この階級に属して才能はあるが神経症の女性と結婚し、田舎へ連れて行って一緒に住もうとする。しかし、彼は騒然としたロンドンの社交界の中心から発せられる破壊的な影響から逃れることができず、金銭的な災難や自殺や嫉妬の影響からもまた脱し切れない。結局、結婚は失敗に終わり、彼の妻は死んでしまう。社交界で猛威をふるう目に見えない力に対して、このように戦い敗れた主人公は進んで隠遁生活に引きこもり、幼い息子との付き合いに満足を求める。この結末にはギッシング自身の上の息子に対する関心が反映されている。『渦』は力強い作品である。長篇小説よりドラマティックで、より直接的な語り口の短篇や中篇を書く時に彼が習得した技術が、ここでは見事に活用されている。1つには彼の長篇以外の作品が大衆の注目を浴びたために、1つにはこの作品

自体の真価ゆえに、『渦』は以前のどの小説よりも売れ行きがよかった。遅ればせながら批評家たちもまた、彼が現代生活を率直かつ忠実に描出できる卓越したリアリズム作家であることを認めたのである。¹⁶

そうこうするうちに、ギッシングの2度目の結婚は最初の場合と同様に不幸なものになっていた。最後は精神病院で死ぬことになるイーディスは、結婚して数年後に精神異常の兆候を示し始めていた。¹⁷ 手紙や日記の中で、¹⁸ ギッシングは彼女が子供たちを放ったらかしにし、召使たちと喧嘩を（追い出すこともしばしばであった）し、短気を起こして家庭を混乱させると言って不満を漏らしている。彼女はギッシングに対して事あるたびに悪態をついていたし、家庭は騒動で常に緊迫していたので、彼は上の息子を（彼の日記の表現を借りれば、「この愛のない全く不似合いの結婚によって生まれた子供」を）哀れに思い、¹⁹ ウェイクフィールドの実家に連れて行ってもらい、そこで一緒に住まわせた。二人が元の鞘に収まる時もあるにはあったが、1897年9月に彼が再びイタリアへ旅立った時、それが二人にとって永遠の別れとなった。この旅行の結果として、彼は初めてノンフィクションの作品を手がけることになる。1つは『チャールズ・ディケンズ 批評的研究』（1898）で、²⁰ この作品を彼はシエナに滞在している時に完成した。²¹ もう1つは、この時期に集めた資料を使って、数年後に書いた旅行記『イオニア海のほとり』（1901）である。²² ディケンズに関する本は主題としての作家を真剣に論じた本格的な研究書で、半永久的にディケンズ批評に影響を及ぼし続けるだろう。この本は、中流階級の人物に関するディケンズの描写に潜む（攻撃と擁護という）分裂した動機を鋭い知覚で分析し、ディケンズのユーモア、性格創造、女性の扱いを正しく評価している。以後、ギッシングはディケンズの専門家として有名になり、この作家の選集のために多くの小説に序文を書くようになった。²³ しかし、実際には序文は6冊目までしか世に出ず、残りは1924年まで出版されなかった。

『チャールズ・ディケンズ』が完成すると、ギッシングはカラブリア、すなわちギリシャとローマの文明が交わった古代世界のマグナ・グラエキアにしばらく逗留するために、南イタリア方面へ旅行した。²⁴ 彼は古典で描かれた人物や出来事との連想によって生まれる自分の感想を表現すべく、ほとんどの旅人が訪れたこともない遺跡へ行った。カラブリアの旅行を終えると、彼は執筆予定の古代ローマに関する本のために、ローマで1ヶ月ほど過ごした。そこで調査をしている間に、彼はH・G・ウェルズ夫妻やアーサー・コナン・ドイルなど、²⁵ 多くのイギリスの友だちと再会することになる。そして、イギリスに戻る途中、彼はベルリンまで回り道をし、旧友エデュアルト・ベルツと数日を過ごした。

1898年4月の中旬にイギリスへ戻ったギッシングは、ドーキングの町に家を借りて執筆を再開した。²⁶ 今回は一人暮らしで、イーディスと下の息子はロンドンを離れず、上

の息子はギッシングの母と妹たちの住むウェイクフィールドにやられて同居したままであった。彼はディケンズの序文、短篇小説、むなしく失敗に終わることになる劇執筆の試みで多忙を極めていたが、²⁷ 近くに住むH・G・ウェルズとは時おり会っていた。その年の6月23日、ガブリエル・フルリというフランス女性から、²⁸ 『新グラブ街』翻訳の許可を求める手紙がギッシングのもとへ届いた。翌月26日に彼女は彼を訪問し、秋には1週間ほど彼の家に滞在した。ギッシングは洗練された知性のある女性、彼の理想主義的な愛の概念を支持できるような、そうした女性に生まれて初めて恋をした。離婚も正式の結婚も確約できなかったが、1899年の春にはパリへ引っ越して、彼は彼女と一緒に住むようになる。ギッシングもガブリエルも保守的な人間だったので、自分たちの結婚は因襲に背く大胆な行為だと思っていた。しかし、彼女の母親は二人の結婚を完全に認めてくれ、そして一緒に住んでくれた。²⁹ パリで新生活を始めたギッシングは、数年間ではあったが比較的幸せな時を過ごすことができた。イギリスを離れる前に彼は『命の冠』（1899）を脱稿していたが、³⁰ これは8年間もの躊躇と誤解を経た後やっと結婚を同意する中年カップルの話である。それは理想主義的な愛についてのギッシングの考えを幾らか表明した小説、国際政治とイギリス帝国主義に対する彼の新たな関心を反映した小説であった。

ギッシングが純愛を捧げ、階級的にも知的にも自分と同等の女性と最後の生活を送っていた時、その関係は厄介なものであった。食事や家庭内の問題などでの言い争いに加え、ギッシングはパリのアパート生活が嫌いで、健康状態も悪かった。更に、イギリスに残してきた家族を扶養するための金がなくて困っていた。それで、彼はカラブリア旅行の合間に付けていた日記を利用して『イオニア海のほとり』（1901）を書いたが、これは彼の趣味と個性を最も直接的に表現した作品となった。この後に続いて書かれた『大ぼら吹きの子』（1901）という小説は、³¹ 進化論を社会問題に当てはめることを攻撃した喜劇的な意味合いを持つ小作品である。それから、また別のノンフィクションの作品『ヘンリー・ライクロフトの私記』（1903）が出版されたが、これは自然、書物、孤独、貧困、ピューリタニズムといった問題についての短い瞑想録集である。自分とよく似た虚構の人物を通して書くことで、ギッシングは宗教、民主主義、余暇、学問について自分が晩年にまとめていた意見を述べることができた。これらの意見は時として彼の小説の傾向と一致し、その瞑想録の大半は彼の小説に見られるエピソードの土台となるような、そういった個人的な思考や経験をはっきりと示している。しかし、ライクロフトの私記を構成する最も魅力的な要素は、作品を通して雄弁に語りかけてくる個人の本質的性格である。つまり、自分の弱点を意識し、実績がほとんどないことを認めながらも、書物、自然観察、過去についての内省からなる平穏な人生の中に、平和を見出すことができる優しい老人の個性である。『ヘンリー・ライクロフトの私記』はギッシングの一番

の人気作品となった。一般人にとってギッシングと言えば、この作品が常に思い出され、その人気は皮肉なことに小説家としての彼の名声を上げさせる結果となった。

ギッシングは肺気腫と診断された病気のために何年間か苦しんでいたが、³² そうした半病人の状態では長期間の療養のために仕事を中断せざるを得なかった。1901年、彼はサフォーク州の療養所で1ヶ月を過ごし、³³ 1902年には健康を考えて温暖な気候の地、南フランスのサン・ジャン・ド・リューズ界隈に転地しなければならなくなった。³⁴ それから、彼はかつて関心があった幾つかの問題に立ち帰りながら、全く違った点に重きを置いた『ウィル・ウォーバートン』(1905)を書き上げた。³⁵ これは彼が生存中に完成させた最後の小説である。この作品では中流階級のビジネスマンが金を失って雑貨商になることを余儀なくされる。しかし、この商売のおかげで彼はビジネス社会の殺人的な競争から逃れ、予期せぬ幸せを見出すことになる。ギッシングは有閑の特権階級に対する昔の愛着が幻想であったことを、そして質素な生活形態に愛情と友情の堅い地盤が見出せることを認識したように思われる。

何年もの間、ギッシングはいつもと全く異なる問題についての本、すなわち6世紀のローマについての歴史小説を書こうと計画していた。このために彼は詳細にわたるメモをとっていたし、最後のイタリア旅行では作品中の幾つかの事件が実際に起こる場所としてモンテ・カッシーノ修道院を訪れていた。³⁶ 『ヴェラニルダ』(1904)はゆっくりと展開する冒険と陰謀の物語で、³⁷ 登場人物や彼らの思考に力点が置かれている。古代ローマの都市や田舎の場面についてのギッシングの所見には、当時の熱心な学生しか感謝しないような、そうした詳細な説明が幾つも含まれている。しかし、彼が作品を完成させることなく死んでしまったので、死後出版された際には最後の5章が不足していた。

1903年12月28日、ギッシングはガブリエルと一緒に住んでいたサン・ジャン・ド・リューズ近くの町、サン・ジャン・ピエ・ド・ポールのイスプールで、肺病の末に息を引き取った。³⁸ 彼は1週間ほど持ちこたえていたが、その間にイギリスにいるH・G・ウェルズとモーリー・ロバーツが彼の病床に呼ばれた。ロバーツが到着したのはギッシングが死んだ翌朝だったが、ウェルズは彼の死に目にもどうにか間に合うことができ、その場面を『自伝の試み』(1934)の中に記している。³⁹ ギッシングの死については論争が繰り広げられた。ウェルズはガブリエルが病人の世話をちゃんとしていないと思い、二人の看護婦(一人はフランス人の修道女、もう一人はイギリス人女性)を連れて来た。彼は病人のために処方された軽い食事では不十分だと考え、もっと食べ物を与えなければならなかったのだが、そうした処置が結果的にギッシングの死に直結したのだとガブリエルは主張していた。ギッシングの話し相手になるように頼まれたイギリス人の司祭は、彼が死ぬ前にキリスト教を信奉するようになったという報告を発表した。⁴⁰ こ

れは死に行く男のうわごとを誤解したもので、ロバーツはガブリエルとイギリス人看護婦から集めた情報をもとに、激しく否定する声明を出した。⁴¹ ギッシングはサン・ジャン・ド・リューズにあるイギリス人の共同墓地に埋葬されている。⁴²

ギッシングの死後に彼の2つの小説が上梓された。1つは未完の『ヴェラニルダ』で、フレデリック・ハリソンの序文と共に出版された。もう1つは完成した最後の小説『ウィル・ウォーバートン』である。彼の数多くの短篇小説は3つの選集、すなわち『蜘蛛の巣の家』(1906)、『境遇の犠牲者』(1927)、『小話小品集』(1938)にまとめられた。⁴³ そして、ロチェスター版ディケンズ全集のために書かれた序文が集められ、『チャールズ・ディケンズの小説批評』(1924)と『不朽の作家ディケンズ』(1924)として世に出た。⁴⁴ ギッシングがアメリカ滞在中にシカゴの新聞に掲載してもらった短篇小説は彼の作品だと鑑定され、『父の罪』(1924)と『ブラウニー』(1931)として再び印刷された。⁴⁵ そして、2つの物語(1つは未発表の、1つは再版の物語)が、『最初のリハーサルと恋敵の牧師』(1970)に収められた。⁴⁶ 物語、随筆、覚書、手紙を含めた未発表の資料は、1962年に『ジョージ・ギッシングの備忘録』、1970年に『ジョージ・ギッシング 随筆と小説』、そして1978年に『ジョージ・ギッシングの小説論』の形で出版されたが、⁴⁷ 最後の作品には以前発表された2つの随筆が再録されている。⁴⁸ 1978年には長年ギッシングが付けていた(書付けや紀行文が収められた)日記が、『ロンドンと後期ヴィクトリア朝のイギリスにおける文学生活 小説家ジョージ・ギッシングの日記』として刊行された。⁴⁹

ギッシングの初期作品群は、詳細な描写、個人的見解の陳述、不自然な(時には煽情的な)プロットを持つ点で、19世紀中葉のイギリス小説における一般的な慣例に従っている。作家としての彼の進化は、読者層の広がりや三巻本形式の衰退に伴う趣味の変化に対応したもので、それによって彼の後期作品群はより簡潔に、より客観的に表現され、より単純な作品構成となっている。彼の小説はヴィクトリア朝の作品を支配していたリアリズムの精神に忠実であるものの、彼自身が教義的にリアリズム作家であったことは一度もない。彼は小説を自分自身の意見の表現媒体と考えていたので、そこには必然的に多くの自叙伝的要素が見られる。自分の作品に個人的な先入観が存在することを否定するどころか、世紀末頃に支配的だったリアリズムの概念とは正反対に、小説は作家の態度を表明したものであるべきだとしばしば主張していた。「小説家が客観的であったことはなかったし、今後もないだろう。作品は作家自身が見た生活の断片である。作家自身の目で世界を見ることによって、またとない喜びを読者に感じさせることが作家の仕事なのだ」とギッシングは述べたことがある。⁵⁰ 小説は一般大衆を喜ばせるために書くべきだという考えを彼は拒絶したが、小説は主観を交えない現実の描写であるべきだという考えもまた同様に拒絶した。小説家に必要なのは、正確さが求められる報道記者の

ような能力ではなく、「嘘を言わない精神」であると思っていたギッシングは、「現代生活を活写する際の芸術家の誠実さ」としてリアリズムを定義し直したのである。⁵¹

ギッシングにとって芸術的に誠実であることは、人生を絶望的ではないにせよ、概して悲観的に見ることを意味する。彼が描く世界には、貧者、女性、芸術家に対する社会の不公平さによって、常に暗い影が射している。その世界は競争、科学、宗教、商業主義、利己主義によって生まれる悪で疲弊している。社会的な不公平を除去するために提示される救済策は、どれもギッシングにとって現実味があるとは思えなかった。ほとんどの人が進歩の兆候として歓迎した産業化と民主化は、彼が尊重した繊細なヒューマニズムにとって脅威であった。彼自身の理想は彼が嘆いた社会の悪弊の解決策とはならなかった。しかしながら、現存する社会は彼が人間の最高の可能性と考えたものを育むことができない。そのことを持続的に考察してきたからこそ、ギッシングはイギリスの中でも社会生活を最も鋭く、最も誠実に観察した小説家の一人だと言えるのである。

ギッシングと同世代の人々は、⁵² 彼の悲観主義と労働者階級の人物に対する無情な扱い方とに対してしばしば不平を鳴らしたが、結局は彼の卓越したテクニックと彼の描く現代生活の場面が本物であることを認めた。『ヘンリー・ライクロフトの私記』は誤って彼の自叙伝と見なされていたが、素晴らしい文体と平穏な精神ゆえに非常な称賛を博し、彼の最も有名な作品となった。比較的最近の批評家たちは、⁵³ ヴィクトリア朝社会の生活に対するギッシングの洞察力に富む描写を強調し、リアリスト的な小説を媒体にして強固な個人的確信の表明に努めるというパラドックスを検証している。1912年1月11日の『タイムズ別売文芸誌』に掲載された記事で、⁵⁴ ヴァージニア・ウルフは「ギッシングがいわゆる英国流の小説執筆法を実践したのはもっともなことである。ある感情の高い峰から次の峰へ飛び移るのではなく、この上なく慎重に彼は隣接する低い尾根の部分をすべて埋め尽くす作業をした。それは時には退屈きわまりない作業である。彼の芸術的なトーンの全体的効果は非常に低いので、その芸術の成果を十分に味わうためには、最初から最後のページまで読まなくてはならない。しかし、根気よく読んで行けば、効果が薄くて意味がほとんどない章も次第に重要性と勢いを増し、読者の想像力の上に蓄積されることによって、もはや逃れられないように思える世界を作り上げることが分かるだろう。(中略) 彼が創造した世界は、まるで土と石でできているかのように いや、比べものにならない位に リアルで、堅固で、説得力に富んでいるが、実際には小さな世界なのである」と書いた。⁵⁵ 一方、『ヴィクトリア朝小説における労働者階級』(1971)の著者 P・J・キーティングは、「小説に労働者階級の人間を登場させる際に、その芸術的問題と真剣に取り組もうとした姿勢を、一連の小説によって跡付けることができるヴィクトリア朝で最初の小説家はギッシングである」と言っている。彼は更に付け加えて、ギッシングの小説は「年代順に研究してみると、(中略)固定化し

た文学の伝統との関係を一貫して真剣に断とうとしたこと、つまり労働者階級について書く時に、いかにして個人的な社会観と芸術的な客観性とのバランスをとるべきかという、そうした問題に必死に取り組んだことを証明している」と述べている。⁵⁶

意見の違いは幾らかあるものの、ギッシングの批評家たちは彼に小説家として高い格付けを与えている。1943年にジョージ・オーウェルは、「『新クラブ街』、『民衆』、『余計者の女たち』を例として挙げただけで私は喜んで言わせてもらおうが、彼ほどの小説家がイギリスで輩出されたことはほとんどない」と書いている。⁵⁷ 『イギリスの小説』(1954)の著者ウォルター・アレンは、「ギッシングは大作家でないが、群小作家よりはかなり優れた作家だ。彼は、その作品の読者に作者本人を必然的に意識させるような、そうした未熟な芸術家の一人である。彼の小説は、おそらく3つの作品の場合を除いて、その創作者から十分な距離が置かれているとは言えない。余りにも個人的すぎるし、恨みを激しく表現したものだと思わざるを得ない。ギッシングは恨みをあからさまに示した最初の小説家であったが、そのような恨みの表現は今日では普通のことである。しかし、この恨みは客観性が欠けるものの、ある意味で彼の作品に普遍性を与えている」と言っている。⁵⁸ そして、『ギッシング 書物の生活』(1982)の中でジョン・ハルペリンは、ギッシングは稀に見るほど数多くの素晴らしい小説と、最もよく知られたヴィクトリア朝の幾つかの小説は別にして、何よりも素晴らしい『新クラブ街』という小説を書いたと主張してから、「ギッシングは一流の小説家である。彼が感受性と知性を使って扱うテーマはどれも重要で、物事に対する彼の理解力は鋭くて精密だ。彼が描く人物とその問題は実にリアルであり、彼の時代だけでなく我々の時代でも社会的な意味がある」と断じている。⁵⁹

訳注

- 1 *Born in Exile: A Novel*. 3 vols. London: Black, 1892.
- 2 ギッシングはロシアの作家たちの作品を読んで得た知識によって、ロシアの精神性をイギリス帝国主義の解毒剤とした。トルストイに献本した『命の冠』では、ギッシングの反軍国主義的態度が18世紀ロシアの無教会派の平和主義的な霊の戦士(Dukhobor)を通して示される。また、ギッシングが何回も読んだツルゲーネフ(Ivan Sergeyevich Turgenev, 1818-83)の『父と子』(1862)では、合理主義思想を信奉して如何なる種類の信仰も受け入れない主人公バザロフの態度が、『流滴の地に生まれて』におけるピークの道徳問題に甚大な影響を与えている。詳しくはPierre Coustillas, *George Gissing and Ivan Turgenev* (London: Enitharmon Press, 1981)を参照。
- 3 スミス・エルダー社と違って、ロレンス・アンド・ブリン(Lawrence & Bullen)は正直な出版社で、政治小説『デンジル・クォリア』に対して100ポンドの内金と売上げの6分の1の印税を提示した。その後もギッシングの初期小説群を廉価版で出版するなど、それなりに彼を儲けさ

せてくれた。

- 4 *Denzil Quarrier: A Novel*. London: Lawrence & Bullen, 1892.
- 5 *The Odd Women*. 3 vols. London: Lawrence & Bullen, 1893.
- 6 1893年5月15日、ギッシングはロンドンのブリクストン(76 Burton Road, Brixton)に家を借りて、そこへ6月末に引っ越した。仕事のためにケンジントンの屋根裏部屋もまた別に借りていた。
- 7 1893年4月16日付けのベルツ宛ての手紙(*Collected Letters* 5: 105)。
- 8 *Illustrated London News* と *English Illustrated Magazine* の編集長だった Clement King Shorter との短篇小説の契約は、ギッシングに商業ベースでの道を切り開いてくれた。
- 9 『新グラブ街』の第4章で、エドウィン・リアドンの妻は「もう長篇小説の時代ではないので、誰でも喜んで読むような短篇小説を書くこと」を夫に勧めている。
- 10 *In the Year of Jubilee*. 3 vols. London: Lawrence & Bullen, 1894.
- 11 「作家協会」は The Incorporated Society of Authors, Playwrights and Composers の略称。1884年、作家の著作権その他を保護する目的で、ウォルター・ベサントによって設立された。機関誌は1884年以来の季刊誌 *The Author*。
- 12 オマル・ハイヤーム(Omar Khayyám, 1048? 1122)はペルシャの数学者、物理学者、天文学者、医学者、哲学者。西洋では英国人の Edward FitzGerald によって1859年に翻訳された四行詩『ルバイヤート』(*The Rubáiyát*)の作者として有名。この文学愛好者のディナー・クラブは、1895年12月に会員となったギッシングにとって、生涯で最も重要な社交の場であった。
- 13 ウェルズ(Herbert George Wells, 1866 1946)は、幅広い自然科学の知識によって独特の想像力を生かした科学小説で文名を確立し、第一次大戦後に文明批評や民衆啓蒙の書を発表し、世界国家建設の理想を主張した。ハーディ(Thomas Hardy, 1840 1928)は、故郷を舞台とした一連の「ウェセックス小説」で知られ、近代機械文明の前に衰退していく田園と人々の悲劇的運命について、故郷の自然美を背景として描いた。人間の意志は宇宙に内在する盲目的意志によって支配されているという宿命観が作品の底流をなしている。クロッド(Edward Clodd, 1840 1930)は銀行家であったが、1884年にジョンソン協会、1892年にオマル・ハイヤーム・クラブの設立に尽力し、オールドバラ(Aldeburgh)の自宅で当時のほとんどの著名人を客としてもてなした。
- 14 *Eve's Ransom*. London: Lawrence & Bullen, 1895; *The Paying Guest*. London: Cassell, 1895; *Sleeping Fires*. London: Fisher, Unwin, 1895; *The Town Traveller*. London: Methuen, 1898.
- 15 *The Whirlpool*. London: Lawrence & Bullen, 1897.
- 16 例えば、1897年6月27日発行の *New York Tribune Illustrated Supplement* の匿名批評家は、「ギッシング氏は最もよい意味でのリアリズム作家だ。芸術のためのリアリズム作家ではなく、実物のためのリアリズム作家である」と述べている。
- 17 1902年2月の初め、イーディスと次男アルフレッドの面倒を見てくれていたミス・オーム(Eliza Orme, 1848 ?)からの手紙で、ギッシングは妻が保護されて精神病院に収容されたことを知った。イーディスは病院に収容されたまま1917年に死亡した。
- 18 ギッシングがイーディスについての悩みを手紙で最も多く伝えた相手は、『余計者の女たち』に関心を持って彼に会いに来た3歳年下のクララ・コレット(Clara Elizabeth Collet, 1860 1948)である。ロンドン大学で政治経済学の学位を取った最初の女性である彼女は、知的に優れて自立した「新しい女」としてギッシングの気に入られ、誠実な友人として彼が死ぬまで陰に陽に力

になってくれた。

- 19 1896年8月9日の日記を参照。ギッシングは長男ウォルターが「気むずかしく、嘘つきで、生意気で、驚くほど利己的で」あるのは、両親の不和を感じ取っているからだとしている。
- 20 *Charles Dickens: A Critical Study*. London: Blackie, 1898.
- 21 1897年9月22日、ギッシングは3度目のイタリア旅行に出発し、25日にシエナ(Siena)に着いた。シエナはイタリア中部の都市で、12世紀から14世紀にかけての聖堂やシエナ派の絵画など、歴史的建造物や文化財に富む。
- 22 *By the Ionian Sea: Notes of a Ramble in Southern Italy*. London: Chapman & Hall, 1901.
- 23 出版社(Methuen)は著作権の切れたディケンズの小説11巻をロチェスター版(Rochester Edition)として出版すべく、それぞれの序文(3,000語)に対して10ギニーをギッシングに支払った。
- 24 ギッシングが旅行のためにナポリを出発したのは1897年11月16日。カラブリア(Calabria)はイタリア半島南端の州で丘陵と山地が多い。マグナ・グラエキア(Magna Graecia)は「大ギリシャ」の意で、南イタリアに紀元前8世紀頃から古代ギリシャ人によって建設された植民市群を指す。
- 25 コナン・ドイル(Arthur Conan Doyle, 1859-1930)は、開業医をしながら私立探偵シャーロック・ホームズが活躍する一連の探偵小説を発表し、本格的推理小説というジャンルを確立した。ギッシングが彼とH・G・ウェルズにオマル・ハイヤム・クラブで初めて会ったのは1896年11月20日。
- 26 5月6日にギッシングが家を借りたサリー州のドーキング(7 Clifton Terrace, Dorking)は、ロンドンの南南西約35キロにある古くからの市場町。ギッシングはイーディスの訪問と手紙を避けるために数人の友だちにしか住所を知らせなかった。この町の北側(Box Hill)には再婚したメレディスが死ぬまで住んでいた家がある。
- 27 ギッシングは“The Golden Trust”という劇に1ヶ月以上かけて挑んだが、結局は第1幕しか書けなかった。
- 28 41歳のギッシングがマルセイユ港の税関所長オーギュスト・フルリ(Auguste Fleury)の娘、ガブリエル(Gabrielle Marie Edith Fleury, 1868-1954)に初めて会った時、29歳の彼女は流暢な英語に加えてドイツ語とイタリア語にも通じ、ピアノに熟達した美しい声の持ち主であった。
- 29 ギッシングとガブリエルが彼女の母アンナ(Anna Fleury)と一緒に住んだ家は、ブローニュの森に近い(13 Rue de Siam, Passy)大きな現代風のアパート。
- 30 *The Crown of Life*. London: Methuen, 1899.
- 31 *Our Friend the Charlatan*. London: Chapman & Hall, 1901.
- 32 肺気腫(emphysema)は弾力性を失って異常に膨張した肺の状態。中年以上の男子に多い。
- 33 子供時代の学友で医者になったヘンリー・ヒック(ギッシングの父に自分の店を売った薬剤師Matthew Bussey Hickの息子)に勧められて、ギッシングは6月の第3週に療養所に入り、しばらくは体重も増えて健康を回復した。
- 34 サン・ジャン・ド・リューズ(St.-Jean-de-Luz)はスペインとの国境に近いピレネー山脈の麓にあるフランス南西端(バスク地方)の海辺の町。隣接する村シブール(Cibourne)でギッシングはビスケー湾(le golfe de Biscaye)を見下ろす大きな家具付き別荘の一階を借りた。作曲家ラヴェル(Maurice Ravel, 1875-1937)は同村の生まれ。
- 35 *Will Warburton: A Romance of Real Life*. London: Constable, 1905.

- 36 モンテ・カッシーノ (Monte Cassino) はイタリア中部、カッシーノ西郊にある修道院で、530年頃に創設されたベネディクト修道会の本山。
- 37 *Veranilda: A Romance*. London: Constable, 1904.
- 38 ギッシングは暑気を避けるために海岸から離れた隣町のサン・ジャン・ピエ・ド・ポール (St.-Jean-Pied-de-Port) へ引っ越したが、7月には更に健康によい気候を求めてカンボ・レ・ブラン (Cambo-les-Brains) へ、そしてピレネー山脈の麓にあるイスプール (Ispoure) へ移った。ギッシングが死んだのは午後1時15分で、直接の死因は心筋炎 (myocarditis) であった。
- 39 『自伝の試み』 (*Experiment in Autobiography*) の第8章に加え、ウェルズは『トーン・バンゲイ』 (*Tono-Bungay*, 1908) の中で語り手の叔父 (Edward Ponderevo) が南フランスの隠れ家で臨終を迎える場面についても、ギッシングの死を看取った時の記憶をもとに描いている。
- 40 ギッシングに英国の雑誌をあげて仲よくなっていたサン・ジャン・ド・リューズのクーパー師 (the Reverend Theodore Cooper) は、この報告を *Church Times* (1863年創設のアングロカトリック派の新聞) に書き送って発表した。
- 41 ロバーツは1904年1月に『チャーチ・タイムズ』へ送った短信の中で、一生涯ギッシングは神学上の教義に敵対していたと述べた。
- 42 ガブリエルはサン・ジャン・ピエ・ド・ポール以外で英国教会の儀式に従った埋葬を望んだ。
- 43 *The House of Cobwebs and Other Stories*. London: Constable, 1906; *A Victim of Circumstances and Other Stories*. London: Constable, 1927; *Stories and Sketches*. Ed. A. C. Gissing. London: Michael Joseph, 1938.
- 44 *Critical Studies of the Works of Charles Dickens*. New York: Greenberg, 1924; *The Immortal Dickens*. London: Cecil Palmer, 1924.
- 45 *Sins of the Fathers and Other Tales*. Chicago: Covici, 1924; *Brownie*. New York: Columbia University Press, 1931.
- 46 *My First Rehearsal and My Clerical Rival*. Ed. Pierre Coustillas. London: Enitharmon Press, 1970. 両方とも1880年の初めに書かれた。
- 47 *George Gissing's Commonplace Book*. Ed. Jacob Korg. New York: New York Public Library, 1962; *George Gissing: Essays and Fiction*. Ed. Pierre Coustillas. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1970; *George Gissing on Fiction*. Ed. Jacob and Cynthia Korg. London: Enitharmon Press, 1978.
- 48 2つの随筆は、1900年1月に雑誌 *Literature* に掲載された“The Coming of the Preacher”と、オーエンズ・カレッジ時代に A. W. Ward 教授へ提出した“The English Novel of the Eighteenth Century”という題のレポート。
- 49 *London and the Life of Literature in Late Victorian England: The Diary of George Gissing, Novelist*. Ed. Pierre Coustillas. Hassocks, UK: The Harvester Press, 1978.
- 50 *The Pall Mall Gazette* の編集長 (Edward Tyas Cook) に宛てた1892年9月10日付けの手紙 (Collected Letters 5: 53)。
- 51 *The Humanitarian* の編集長 (William Walker Wilkins) に宛てた1895年5月19日付けの手紙 (Collected Letters 5: 334)。
- 52 例えば、*The Spectator* 誌の1891年5月30日号に載った匿名批評家による『新グラブ街』の書評では、「救いがたいほど陰鬱で読者の気力をくじく」が、「どのページにも情け容赦ないリアリズムの力がみなぎっている」と述べられている。

ギッシングの生涯と作品（後）

- 53 例えば、ギッシングの文学的資質の分析および彼と主要なヴィクトリア朝作家たちとの比較を行なった Adrian Poole, *Gissing in Context* (London: Macmillan, 1975) や、ギッシングの小説に見られるイデオロギー的要素をマルクス主義の立場で分析した John Goode, *George Gissing: Ideology and Fiction* (London: Vision Press, 1978) など。
- 54 『タイムズ文芸サプリメント』 (*The Times Literary Supplement*) は通称 TLS で知られる英紙 *The Times* の別売週刊補遺。1901年に月刊で始まり、現在の発行部数は3万弱で、英国の代表的な文芸誌。
- 54 ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) は1920年代における新文学の開拓者の一人で、代表作『ダロウェイ夫人』 (*Mrs. Dalloway*, 1925) や『灯台へ』 (*To the Lighthouse*, 1927) では、人物の意識の流れを鮮やかな内的現実へと開花させた。
- 56 P. J. Keating, *The Working Classes in Victorian Fiction* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971) 52-53.
- 57 George Orwell, “George Gissing,” *Collected Articles on George Gissing*, ed. Pierre Coustillas (New York: Barnes & Noble, 1968) 54. オーウェル (1903-1950) は全体主義的権力国家の恐怖を痛烈に諷刺する寓意小説『動物農場』 (*Animal Farm*, 1945) や空想未来小説『1984年』 (*Nineteen Eighty-Four*, 1949) の他に、イギリス帝国主義の圧政を非難する小説、スペイン内戦体験記などの随筆や評論を書いた。
- 58 Walter Allen, *The English Novel: A Short Critical History* (London: Phoenix House, 1954) 275-76. アレンが挙げた3つの作品とは『ヘンリー・ライクロフトの私記』、『新クラブ街』、『サーザ』。
- 59 John Halperin, *Gissing: A Life in Books* (Oxford, UK: Oxford University Press, 1981) 2-3.

(出典) Jacob Korg, “George Gissing,” *Dictionary of Literary Biography*, ed. Ira B. Nadel and William E. Fredeman (Detroit: Gale Research, 1983) 18: 109-19 <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/gg-dlb.html> .

(完結)

